九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『紅楼夢』薛宝釵の人物像と梨花

竹之内，美樹香
九州大学大学院人文科学府単位取得退学

https://doi.org/10.15017/9587

出版情報：中国文学論集. 34, pp.60-73, 2005-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『紅楼夢』薛宝釵の人物像と梨花

竹之内　美樹香

はじめに

草花を以て女性を象徴する手法は、古今東西、いずこの文学作品にも見られる。日本文学の場合、『源氏物語』では、葵、末摘花、花散里、紫、夕顔等、数多の女性の名前に草花が用いられ、それらはそれぞれの性格や容姿を表徴するものとなっている。また西洋においても、ギリシャ神話では、豊饒の女神であるペルセポネーに石榴の象徴が、美と愛の女神であるアフロディアに薔薇の象徴が見られるなど、女性の人物像に花のイメージが濃密に投影されている。

事は中国文学においても例外ではなく、その最も代表的な例の一つが『紅楼夢』であろう。『紅楼夢』では、美女達の名前や気性、創作する詩詞、また運命に到るまで、あらゆる事柄に花のイメージが関係しており、きわめて重要な役割を担っていると考えられる。[1] 今、美女と花との組み合わせを具体的に示せば次の通りである。

○賈元春……榴花　◎薛宝釵……牡丹、梨花　◎探　春……杏花、玫瑰花　○李　紈……梅花
○史湘雲……海棠　○麝　月……茶蘼　◎香　菱……菱花、蓮花　◎林黛玉……芙蓉、桃花
○花襲人……桃花　○尤三姐……玫瑰花　○晴　雯……芙蓉　○夏金桂……桂花

ここで、◎の印がついている女性には、ただ単に一花のみではなく、二つの花の象徴が見られる。このことは、彼女達の人物像が、二つの花によって複合的に表象されていることを意味する。即ち、

作者曹雪芹は、彼女達の様々な側面を複数の花を用いることによって表現しようとした、と考えられるのである。

筆者は以前、薛宝釵と牡丹との関係について論じたことがあり、その際に、彼女の牡丹は通常の紅牡丹ではなく、白牡丹ではないかという考察をなした[2]。彼女と関係の深いもう一つの花である梨花も白色であるので、「色」という観点から見れば、この二つの花には通じるものがある。けれども、「花」として見ると、両者のイメージにはかなりの隔たりがあると言わざるを得ない。百花の王である牡丹が、「高貴」、「艶麗」、「華美」といった華やかなイメージを有するのに対し、一方の淡白な花とされる梨花は、「寂寞」、「冷艶」、「悲哀」といった寂しげなイメージを持つ。薛宝釵は、「容貌豊美」（第五回）と形容されることからわかるように、牡丹の如く華やかな美女として描かれており、第六十三回の花籤の場面でも、彼女が引き当てる籤は牡丹という設定になっている[3]。つまり、薛宝釵の人物像には、一方で牡丹のイメージが濃密に投影されていると言える。にもかかわらず、牡丹と正反対のイメージを持つ梨花との密接な結び付きがあるのは何故であろうか。果たして、梨花は、薛宝釵の人物造型にどのように機能しているのであろうか。

本稿では、先ず、『紅楼夢』中に描かれた二種類の花の象徴をもつ女性に注目し、それらの人物像に花の形象がどのように関わっているのかを明らかにした上で、薛宝釵と梨花との関係について考察したい。また、明清の小説や戯曲に描写された梨花のイメージについても併せて述べたいと思う。

一　『紅楼夢』の女性の人物造型と花

先ず、林黛玉と花との関係について見てみよう。彼女の場合、花全体との深い関連が見られるが、その中でも、彼女の人物造型に密接に関わる花は、芙蓉と桃花である。林黛玉と芙蓉との結び付きは、第六十三回の花籤の場面において林黛玉が芙蓉の籤を引き当てること、また、第七十八回から第七十九回にかけて、芙蓉の花神になったとされる晴雯を賈宝玉が祭る場面があり、その終わりに、芙蓉の花影から林黛玉が現れることなどから窺うことができる。実は、この林黛玉の芙蓉に関しては、木芙蓉とする説と、水芙蓉即ち蓮とする説とがあり、解釈が分かれて

いる。[4] 上の二つの場面を見てみると、第七十八回から第七十九回にかけての芙蓉は、季節が初秋の頃と設定されていることから、木芙蓉と解した方がよいように思われるが、花籤の場面の芙蓉は、決定的な証拠がなく、どちらを指すのか断言できない。詩詞などを見ても、芙蓉と蓮花とは混同して用いられることが多く、第七十八回から第七十九回の芙蓉が木芙蓉であるのを理由に、林黛玉の芙蓉を全て木芙蓉と断定するのは無理があるであろう。思うに、林黛玉の芙蓉は、「木芙蓉」「蓮」どちらか一方だけを指すのではなく、両者を含めたものなのではないだろうか。海棠（春海棠）と秋海棠（ベゴニア）とを明確に区別せずに海棠として用いている箇所があるように、芙蓉についてもそこまではっきりとした区別はなく、「ハスの花」全般を指して芙蓉と言っているように思われるのである。本稿では、このような観点から林黛玉と芙蓉との関係について考察したい。

賈宝玉が晴雯を祭る第七十八回の場面では、『芙蓉女兒誄』という祭文が詠まれる。この祭文は、生前の晴雯のことを偲んだものだが、脂硯斎[5]が「……又當知雖來（誄）晴雯、而又實誄黛玉也……。」（……又當に知るべし、来たりて晴雯を誄すと雖も、而して又実は黛玉を誄する也……。）（第七十九回）というように、その背景には林黛玉の存在が意識されていると考えてよいであろう。実際、林黛玉と晴雯は、自分の感情に率直な、俗世に染まらない、という点で似通う女性として描かれている。『芙蓉女兒誄』中にも「憶女兒曩生之昔、其爲質則金玉不足喩其貴、其爲性則冰雪不足喩其潔、其爲神則星日不足喩其精……。」（憶うに女児は曩に生くるの昔、其の質たるや則ち金玉も其の貴きに喩うるに足らず、其の性たるや則ち氷雪も其の潔きを喩うるに足らず、その神たるや則ち星日も其の精を喩うるに足らず……。）という表現があり、これはまさしく林黛玉の気性そのものと言っても過言ではない。そして、そうした彼女の高潔さは、「……出淤泥而不染、濯漣漪而不妖。」（……淤泥より出づるも染まらず、漣漪に濯わるも妖せず。）（宋・周敦頤『愛蓮説』）といわれる芙蓉とぴったり重なり合う。[6] また、李白が「清水出芙蓉、天然去雕飾。」（清水　芙蓉を出だし、天然　雕飾を去る。）といったように（「經亂離後天恩流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋大守良宰」詩）、芙蓉は装飾のない、天然の美を備えた花とされる。林黛玉は、その香りを例にとって見てもわかるように、「自然」の香りを身に纏う、「眞正香玉」（第十九回）といわれる女性である。[7] つまり、彼女の場合、「自然の美」、即ちもって生まれた「真の美」がその魅力の一つとなっているのである。こう考えると、芙蓉は、林黛

玉に相応しい花と言うことができよう。

次に、林黛玉と桃花との結び付きは以下の諸例によって確かめることができる。先ず第二十三回には、林黛玉が花を葬る、所謂「葬花」の場面に桃花が用いられている。また第二十七回には、林黛玉の口ずさむ「葬花」詩の中に「桃李」という語句が用いられている。続いて第三十四回には、彼女の顔が「只見腮上通紅、自羨壓倒桃花、卻不知病由此萌。」（頬が真っ赤に染まり、桃の花そこのけの鮮やかさには我ながら惚れ惚れするほど、まさか病気の徴候とは知るよしもありません。）と表されている。更に第七十回には、回目に「林黛玉重建桃花社」と記されるように、「桃花社」という詩社の社主に林黛玉がなっている。薄紅色の艶麗な花である桃花は、美女の象徴とされ、結婚や求愛のシグナルとして用いられる。明るく、陽気な花であることから、幸福のイメージが重ねられることが多いが、しかしまた一方で、「薄命」を象徴する花ともされる[8]。思うに、林黛玉の桃花は、この「薄命」を強く意味するのではないだろうか。というのも、前述した林黛玉に桃花が結び付いている場面には、いずれも彼女が「薄命」であることが暗示されているからである。紙幅の都合から、全てを具体的に示すことはできないが、例えば第二十三回の「葬花」の場面では、「則爲你如花美眷、似水流年。」（則ち你の花の如き美眷しきが為なるか、水の似く年は流く）とあるように、「薄命」を示す詩が幾つも詠まれるし、第三十四回の彼女の顔が桃花に喩えられる箇所でも、病気が絡んでおり、「薄命」であることが暗示されている。こうして見ると、桃花は林黛玉の「薄命」を表徴する花と考えられる。

次に香菱と花との関係を見てみると、彼女には、蓮花と菱花との強い結び付きが見られる。先ず、蓮花との結び付きは、彼女の元々の名前が英蓮であることに窺われる。また、第五回の十二釵の運命が暗示される場面では、根も葉も枯れはてている蓮の図と「根並荷花一莖香、平生遭際實堪傷……。」（根は荷花と並んで一茎香ばし、平生の遭際実に傷しむに堪えたり……。）という文句で、彼女の運命が表されている。更に第七十九回には、賈宝玉が、人気のない「紫菱洲」の寂寥感漂う風景の中にある蓼の花や香しい菱などを見て、「池塘一夜秋風冷、吹散芰荷紅玉影。蓼花菱葉不勝愁……。」（池塘一夜　秋風冷ややかに、吹き散らす　芰荷紅玉の影。蓼花菱葉　愁いに勝えず……。）と吟じる場面があるが、その終わりに突然香菱が現れている。注目されるのは、ここでの蓮も第五回のそれと同様に、

美しく咲き誇る蓮ではなく、散った蓮、即ち、衰残した蓮であることである。この「衰残枯死した蓮」[9]は、一種の「滅びの美」、「薄命の美」の対象として詩歌などにおいて好んで歌われ、蓮の美の典型の一つとされる。香菱は、本妻である夏金桂にいびられ、終には血の病で落命する運命にある。このような香菱の寂しく憔悴した、哀しい最期の姿を表すのに、枯れた姿がことさらに印象的な蓮花が用いられたのではないだろうか。

次に、菱との結び付きについて述べると、先ず香菱という名前に菱の字が含まれていることが挙げられるが、他にも、彼女に菱の象徴があることを示す箇所は多い。その最も顕著な例が、前述の第七十九回の「紫菱洲」で賈宝玉が詩を吟じる場面である。この詩の中で、菱は、か弱きものとして歌われている。実は、興味深いことに、この菱が取り上げられる場面の後には、香菱が本妻の夏金桂やその女中である宝蟾のいじめを受け、更には夫の薛蟠にも暴力をふるわれる話が展開される。これらの場面に描かれる弱々しい香菱の姿と、賈宝玉の詩に歌われるか弱き菱とは重なり合うものがある。逆に言えば、だからこそ、香菱の悲惨な境遇が描かれる場面の直前に、いまにも折れそうな菱が取り上げられ、それと香菱とが結び付いているとも言えるであろう。

最後に探春の場合、彼女には、杏花と玫瑰花との関連が見られる。先ず杏花[10]との結び付きは、第六十三回の花籤の場面で彼女が杏花の籤を引き当てることから窺うことができる。その花籤には、「得此籤者、必得貴壻……。」という注が記されており、彼女が高貴な婿のところへ嫁ぐことが暗示されている。実際、探春は、遠方ではあるが、良家に嫁ぐ運命にある。杏花は、周知の通り、科挙と縁の深い花であることから、「高貴な身分の婿」の象徴でもあるので、そうした意味でこの花と探春の運命とは重なり合うと言えよう。そしてもう一つ、この関係の背景には、探春自身の「才の高さ」も起因しているように思われる。彼女の才の高さについては、例えば第五回に「才自精明　志自高」（才は自ら精明　志は自ら高し）とあるように、彼女の魅力の一つとして取り上げられる事柄である。即ち、「及第花」の雅称をもつ杏花は、探春自身の「優秀さ」をも表す花として用いられているのではないだろうか。[11]

次に玫瑰花との結び付きは、第六十五回の次の言葉から確かめることができる。

三姑娘的渾名是玫瑰花……玫瑰花又紅又香、無人不愛的、只是有刺戳手。（三番目のお嬢様（探春）の渾名は玫瑰花といって……この花は赤くてよい香りがするので、誰もが愛でますが、刺があって手を刺します。）

探春の普段の人柄を見ると、穏やかで物言いもおっとりとしているが、それはあくまでも表面のことであって、実際の彼女は、かの王熙鳳も一目置くほど、非常に頭のきれる、決して侮ることのできない女性として描かれている。時に、彼女のことをよく知らない妻女達が甘く見ることがあるが、そうした者は皆手ひどく叱られ、痛い目にあうのである。玫瑰花は、こうした一見愛くるしいが、実は鋭利な内面を持っている探春の気性をよく表していると言える。

以上、林黛玉、香菱、探春の人物描写は、二つの花によって、その境遇や運命、性格、また表面に表れる気性とは違う内面などの様々な面貌が表現されていることがわかる。もとより人間の像は矛盾する性質を具有し、その構造は極めて複雑である。曹雪芹が一人の人間に二つの花の形象を付与したのは、こうした単純には表すことのできない、表面と裏面とを併せ持つ人間の本質をより鮮明なかたちで描き出そうとしたためではあるまいか。

二　薛宝釵と梨花[12]

前述したように、薛宝釵には、彼女が引き当てる花籤の牡丹とは全く正反対のイメージを持つ梨花との結び付きが見られる。ここでは、そのことについて具体的に見てゆきたい。先ず、薛宝釵と梨花との結び付きを示す例として、彼女の専用薬である冷香丸が梨の樹の根元に埋められていることが挙げられる。また、薛宝釵が賈家に来て初めて住む場所が梨香院という設定になっていること、更にまた、薛宝釵の姓である「薛」が「雪」と音通であることもそのことを示している。[13]「梨雪」という言葉があるように、梨花の白さは雪に喩えられることが多く、詩詞等においてもそうした例は枚挙に暇がない程見られる。そしてもう一つ、薛宝釵の肌の色が殊のほか白いことも、彼女と梨花との結び付きを象徴的に示しているであろう。薛宝釵の肌の白さは、次の第二十八回の場面に最も顕著に示されている。

寶玉在傍看着雪白一段酥臂、不覺動了羨慕之心、暗暗想道「這個膀子要長在林妹妹身上、或者還得摸一摸、偏生長在他身上。」（宝玉は傍で雪のように白いなめらかな腕を見ていると、思わず羨ましくなり、「この腕が黛

『紅楼夢』　薛宝釵の人物像と梨花

玉さんについていたら、或いはちょっと撫でることができるかもしれないが、あいにく宝釵姉さんの身体についているからなあ。」と、心ひそかに思います。）

このように、梨花と深い関連にある薛宝釵が、際立って色白であることは、甚だ象徴的と言えよう。

ところで薛宝釵は、しばしば楊貴妃に喩えられるが、このことにもまた、梨花との関連を窺うことができる。というのも、かの有名な長恨歌で「玉容寂寞涙欄干、梨花一枝春帯雨。」（玉容寂寞として　涙欄干たり、梨花一枝春雨を帯ぶ。）と歌われて以来、楊貴妃は、梨花の象徴の一部となっているからである。『紅楼夢』においても、第十七・十八回には「梨花春雨」と書かれた額があり、第二十八回には、宋・秦観の「鷓鴣天」詞の「雨打梨花深閉門」[14]という文句が見え、雨に打たれた梨花が扱われている。これらの場面に楊貴妃は直接関係していないが、「梨花春雨」といえば、必ずその背景には楊貴妃のことが思い浮かんだはずである。また、楊貴妃は、馬嵬の変において梨花の樹の下で落命したとされているが[15]、『紅楼夢』では、この馬嵬のことも織り込まれている。即ち、第五十一回に見える「馬嵬懐古」という次の詩がそれである。

寂寞脂痕漬汗光、　寂寞たる脂痕　汗に漬りて光り、
温柔一旦付東洋。　温柔　一旦にして東洋に付す。
只因遺得風流跡、　只だ　風流の跡を遺し得たるに因りて、
此日衣衾尚有香。　此の日も　衣衾に　尚お香有り。

ここに、梨花という言葉は用いられていないが、馬嵬といえば、やはり梨花の樹の下で落命した楊貴妃の姿が連想されたであろう。このことを決定的に裏付ける証左とは言い難いが、曹雪芹の祖父である曹寅に、「梨花」詩（「詠花信廿四首」の第十六首。『楝亭詩別集』[16]巻一に収める）があり、そこに、

斷送一生常是涙、　一生を断送し　常に是れ涙、
洗妝難破馬嵬愁。　洗妝破し難し　馬嵬の愁。

と、馬嵬のことが歌われているのは注目される。

以上のように、薛宝釵には梨花との結び付きが見られ、そのことは、彼女が喩えられる楊貴妃と梨花とのつなが

りからも窺うことができる。[17] それでは一体、薛宝釵の梨花は、彼女のどのような特質を表象しているのであろうか。梨花の意味するものは何なのであろうか。叙述の都合上、そのことを述べる前に、梨花のイメージについて瞥見しておきたい。なお比較的よく知られている詩詞等における梨花については、紙幅の関係から紹介を割愛し、本稿では、明清の戯曲や小説のそれを見てゆくことにする。

三　明清の戯曲や小説における梨花

梨花は、牡丹や梅花等の花に比べると、用いられる頻度はさほど多くないけれども、決して少ないというわけではない。小説や戯曲などにおいて、梨花がどのように用いられているのかを見てみると、概ね、以下のように大別することができるであろう。①孤独感、寂寞感、悲哀感、恨みや愁い、儚い感情と梨花とが結び付いている例。②『長恨歌』のイメージから、「雨打梨花」を薄幸な女性に重ね合わせる例。③雪の降る様子を梨花の花びらが舞い散る様に喩える例。④戦いの様子を梨花の花びらが舞い散る様に喩える例。⑤色の白い美女を喩えるのに梨花を用いる例。⑥唐の王建が夢に梨花を見た故事から、「梨花夢」、「梨花雲」で夢境を表す例。[18]

以上のうち、③、④、⑤は視覚的なもの、⑥は夢のことをいう例なのでわかりやすいように思われる。そこで本稿は、①、②の例を中心に見てゆくことにする。[19] これらは、梨花のイメージをより鮮明に表すものとして注目される。

①孤独感、寂寞感、悲哀感、恨みや愁い、儚い感情と梨花とが結び付いている例

小説や戯曲などにおいてよく見られる場面の一つに、夫婦、あるいは恋人関係にある男女が何らかの事情で別れなければならない、というものがある。そこには、悲しみや苦しみ、孤独感、寂寥感といった別れに伴う様々な感情が描かれるが、梨花はそうした感情を象徴するものとしてしばしば用いられる。幾つか例を挙げれば、例えば、明・沈受先『三元記』第二十一出「歸槽」には、都に行った夫を想う馮妻の孤独感を表すのに、「思藁砧、慕藁砧、一

片梨花白繞銀、孤眠擁翠衾。」とあるし、明・鄭若庸の『玉玦記』第四出「送行」では、主人公の王商が受験のために妻と別れて都へ旅立つ際、「怕清宵漏永、怕清宵漏永、綉被擁鶏声、梨花月痕冷。」という場面がある。また、明・陳汝元『金蓮記』第八出「外謫」には、離れ離れになっていた蘇軾と妻の王氏がやっと再会できた場面で、王氏が蘇軾に、「相公、我在家中呵、閑青粉、冷翠鈿、梨花門掩度芳年。」と、一人寂しく過ごしていた間のことをいう。

こうした別れの場面以外でも、梨花は、悲しみや愁い、寂寥感といった負の感情を表す花として用いられることが多い。例えば、明・湯顕祖の『牡丹亭還魂記』二十四出「拾畫」には、柳夢梅が旅先で鬱々としている場面に、「脉脉梨花春院香、一年愁事費商量。不知柳思能多少、打迭腰肢鬬沈郎。」とある。また、同じく『牡丹亭』二十七出「魂遊」には、杜麗娘の亡魂が、以前に住んでいた屋敷の荒れ果てた様子を見て、悲しみに涙を流す場面があるが、そこに「冷冥冥、梨花春影。」とある。この他、清・樵李烟水散人編の『合浦珠』[20]第三回には、ヒロインの素馨こと友梅が「春閨怨」という詞の中で「門掩梨花、燕子重来了、鸞鏡空留匣、春山久不描。」と唄う場面があり、ここでは梨花が寂寞感を伴う花として用いられている。

その他、恋の愁いを表すのに梨花が用いられる例もしばしば見られる。例えば、元・王実甫の『西廂記』第一出「佛殿奇逢」には、張君瑞が崔鶯鶯に一目惚れするも、その後、姿が見えずやきもきする場面に、「門掩着梨花深院、粉墻兒高似青天……。」とあるし、また、明・汪廷訥の『種玉記』第六出「箋允」にも、衛少児が霍仲孺に心奪われ、彼を想う場面に、「一搦腰肢東風軟、怕入梨花院。春深怯杜鵑、瘦不勝衣、多愁多怨。」とある。更にまた、明・徐復祚『紅梨記』第十一出「錯認」にも、趙伯疇が素秋を必死に捜し回る場面に、「素秋、我與你這等無縁、似黄昏門掩梨花院、人不見、月空懸。」とある。

②「長恨歌」のイメージから、「雨打梨花」を薄幸な女性に重ね合わせる例

「長恨歌」で雨に打たれる梨花に涙を流す楊貴妃の姿が重ねられて以来、梨花は、涙を流す美人や寂莫たる美人、悲しみの美人といった哀愁漂う美人の象徴として用いられるようになる。それは小説や戯曲においても同様で、例えば、『種玉記』第十出「愴別」には、霍仲孺が衛少児の泣く姿を見て、「我聞伊此言不勝咽哽、怎忍見湿梨花泪雨

傾、更難當嬌啼百囀鶯。」という場面があるし、明・范受益の『尋親記』第八出「移屍」にも、帰らぬ夫を待つ郭氏の寂寞な様子を表す場面に、「風動柴門客到家、瀟瀟疏雨打梨花。」とある。更にまた、明・湯顕祖の『紫簫記』第二十四出「送別」にも、夫の十郎と別れるにあたり涙を流す小玉の様子を表すのに、「冰壺迸裂薔薇露、闌干碎滴梨花雨、鮫盤濺湿紅綃霧。」とある。[21]

このように哀愁漂う美女を象徴する他、雨に打たれる梨花は、美女の衰弱した姿やその死を表すこともある。[22]例えば、明・楊柔勝の『玉環記』第十三出「玉簫女亡」には、韋皐を想う玉簫が「韋皐」の名前を涙ながらに叫び、落命する様子を表すのに、「落雁沈魚嬌無比、一旦成虚廃、梨花帯雨飛。」とあるし、明・王濟の『連環記』[23]第二十六齣「擲戟」には、ヒロインの貂蝉が自ら死のうとする場面に、「香褪了含宿雨梨花貌、帯寛了舞東風楊柳腰。不能夠畫春山眉黛巧、羞見你轉秋波顔色嬌。」とある。更にまた、清・封雲山人の『鉄花仙史』[24]第三回にも、夏瑤枝のやつれた様子を表すのに、「……看瑤枝微帯慘容、如臨風弱柳、含雨梨花、甚覺可憐。」とある。[25]

その他、楊貴妃そのものと梨花とを結び付けて、美人の憔悴した姿を表す場合もある。例えば、『西廂記』第七出「夫人停婚」には、母親の心変わりによって張君瑞との結婚ができず、崔鶯鶯が悲しむ場面に、「玉容寂寞梨花朶」とあるし、また、明・顧大典の『青衫記』第八出「蛮素聞捷」にも、樊素と小蛮が行方の知れぬ白楽天を想うあまり憔悴する場面に、「懶梳雲鬢、懶貼翠鈿、玉容憔悴梨花面。」とある。

以上見てきたように、梨花は、別れの場面や恋煩いの場面などに多く見られ、そうした場面に伴う「孤独」、「悲哀」、「寂寞」、「愁思」といった「負の感情」を表す花として用いられる。また、梨花に女性が重ねられる場合、「長恨歌」の楊貴妃のイメージから、「寂寥」、「憔悴」、「孤独」といった薄幸な女性である場合が多いことが指摘できる。全般的に梨花は、「負のイメージ」を表す花として用いられていると言える。そもそも梨花は、色のない白色の花を他の花々が舞い散る春の終わり、所謂「落花の季節」に咲かせるという特徴を有する。加えて、「梨」の音が「離」と同音であることから、しばしば二人の離別を意味することもある。そのことを具体的に示せば、例えば、前述したように、楊貴妃が落命したのは梨花の樹の下とされるが、梨花である所以はそれに「離別」の寓意があるからであろうし、また、先に挙げた諸例のように、別れの場面で梨花が頻見するのも、同様の理由によるであ

ろう。即ち梨花は、その外観の表すイメージ、花そのものが発するメッセージ、いずれも人の哀感をそそる花であったのである。

まとめ

薛宝釵は、林黛玉と違い、屋敷には母親と兄と一緒に居住しており、金銭的にも余裕がある。また、性格もおおらかで、老若男女を問わず皆から愛され、その境遇は「高貴」、「華麗」と言える。しかしまた一方で、夫となる賈宝玉が林黛玉を愛しつづけ、終いには彼に棄てられてしまうという「冷寞」、「寂寥」な運命にもある。思うに、梨花は、この薛宝釵の華やかな面とは別のもう一つの面、即ち「負の側面」を表すものとして用いられているのではないだろうか。だからこそ、彼女の表象とも言うべき冷香丸は、梨花の樹木の下に埋められているのであろう。第五回の金陵十二釵図において薛宝釵の運命は、雪の中に金釵が落ちている図と「金簪雪裏埋」という文句で暗示されている。図と文句は、彼女が金玉縁によって賈宝玉と結ばれるものの、結局は空しい結婚生活を送ることを表している。ここで注意したいのは、そうした彼女の「空虚」、「寂寞」とも言える運命が「雪裏埋」という形で示されている点である。前述したように、雪と梨花とは重ねられることが多い。とすれば、「雪中に埋もれる」ということと「梨花の樹下に埋められる」ということとは、一脈相通じるものがあるのではなかろうか。即ち、「雪中に埋もれる」が如き薛宝釵の悲惨な運命は、「梨花の樹の下に埋められる」冷香丸によっても暗示されていると考えられるのである。むろん、厳密に言えば、雪と梨花とは異なる物体であるし、冷香丸が梨花の樹の下に埋められるのは、医学的な効用にもよるであろう。けれども、「雪」と「梨花」、この相似する二つの物体いずれもが、薛宝釵の象徴物を「埋」めているというのは、やはり単なる偶然にしては不自然であり、曹雪芹の故意によってなされたのであろうと推察される。

文学作品において、登場人物の人物像をより立体的に、重層的に造型するために、それぞれの気性を表す典型的なもの、即ちその人物の象徴となる要素を取り込むことはよく見られる。『紅楼夢』の場合、その要素の一つが花

であって、それも人によっては一花のみではなく幾つかの花が結び付けられているといえる。考えてみれば、一人の人間が幾つかの花によって喩えられるという現象は、歴史上の有名人物においても認めることができる。例えば、楊貴妃を例に挙げると、人を魅了する妖艶な姿には牡丹や海棠の形象が重ねられているし、悲しみに憔悴した姿には梨花のイメージが重ねられている。以上のように見てくると、薛宝釵という一人の女性に、牡丹と梨花という正反対のイメージを持つ二つの花が結び付いているのは、却って複雑な性格を持つ現実の人間を形象したものと考えられるのである。

注

（1）『紅楼夢』の花に関する主な論文に、周蕙氏「人生是花―試論『紅楼夢』中的花」（『紅楼夢学刊』一九八六年第一輯）、合山究氏「『紅楼夢』と花」（『紅楼夢新論』所収、汲古書院、一九九七年）、伊藤漱平氏「『紅楼夢』に於ける象徴としての芙蓉と蓮―林黛玉、晴雯竝びに香菱の場合」（日本中国学会『日本中国学会創立五十年記念論文集』、汲古書院、一九九八年）、森中美樹氏「『紅楼夢』における情愛描写と桃花」（中国中世文学会『中国中世文学研究』第四十七号、二〇〇五年）がある。また、この他、『紅楼夢』百二十回に描出されている植物をカラー写真付きで紹介する潘富俊氏『紅楼夢植物図鑑』（猫頭鷹出版社、二〇〇四年）もある。

（2）「『紅楼夢』薛宝釵の人物像における牡丹花の投影―白牡丹との関連を中心として―」（九州中国学会『九州中国学会報』第四十二巻、二〇〇四年）。

（3）この場面では、皆が薛宝釵に「ちょうどぴったりだわ、あなたには牡丹の花がふさわしいわ。」と言う。

（4）芙蓉をめぐる論争については、伊藤論文（注1）に詳述されている。なお伊藤氏は、林黛玉の芙蓉を木芙蓉と解されている。

（5）陳慶浩編著『新編石頭記脂硯齋評語輯校』（中国友誼出版公司、一九八七年）。

（6）このことについては、張慶善氏「説芙蓉」（『紅楼夢学刊』、一九八四年第四輯）にも述べられている。

（7）注2拙稿参照。

（8）例えば、清・李漁『閑情偶寄』の巻十三、種植部木本第一桃の箇所に「……而寿之極短者亦莫過于桃、「紅顔薄命」之説、単爲此種。」とある。

（9）こうした蓮のイメージについては、市川桃子氏「古典詩の中のはす―荷衰へ芙蓉死す―」（日本中国学会『日本中国学会報』第四十二集、一九九〇年）に詳しい。

（10）杏花についての主な論考に、竹村則行氏「一生心事杏花詩―元好問の杏花詩について―」（九州大学文学部『九州文化史研究所紀要』第三十六号、一九九一年）、矢嶋美都子氏「漢詩に於ける杏花のイメージの變遷」（日本中国学会『日本中国学会報』第四十三集、一九九一年）がある。

（11）『紅楼夢』の底本には、兪平伯校訂『紅楼夢八十回校本』全四冊（人民文学出版社、一九九三年、初刊は一九五八年）を使用し、本文の訳は伊藤漱平訳『紅楼夢』（平凡社、一九九六～九七年）を参照した。

（12）筆者は、先に「『紅楼夢』と五行思想―薛宝釵の「金」、林黛玉の「木」を中心に―」（九州中国学会『九州中国学会報』第四十三巻、二〇〇五年）において、薛宝釵と白色との関係について論じた。梨花は白色であることから、本稿には前稿と重複する部分がある。

（13）このような薛宝釵における雪と梨花との結び付きについては、護花主人（王希廉）『三家評本紅樓夢』（原名『增評補像全圖金玉緣』、上海古籍出版社、一九八八年）にも「梨花如雪、梨香院正好住薛宝釵。」（第四回）という評があり、従来の論者も着目していることが窺える。

（14）この句は同じく秦観の「憶王孫」詞にも見られるが、「憶王孫」詞を李重元の作品とするテキストもある。

（15）このことについては、「楊太真外伝」（巻下）に「力士遂縊於佛堂前之梨樹下。」とあり、『唐國史補』（巻上）にも「玄宗幸蜀、至馬嵬驛、命高力士縊貴妃于佛堂前梨樹下。」とある。また、『紅楼夢』中に度々引用される『長生殿』においても、楊貴妃は梨花の樹の下で殺されるという設定になっている。ただ、楊貴妃の死に関しては、他に服毒説や惨殺説などがあり、確実なことは不明である。

（16）『棟亭集』（上海古籍出版社、一九七八年）所収。

(17) 薛宝釵と楊貴妃と梨花との結び付きについては、太平閒人（張新之）『三家評本紅樓夢』（注13）に、「三十回寶玉以釵比楊妃、梨花樹下、楊妃埋玉之所也。」（第七回）という指摘がある。また、沈治釣氏（「從會芳園到大觀園」（『紅樓夢学刊』、二〇〇一年第四輯）も、薛宝釵と冷香丸、楊貴妃と梨との関連から、楊貴妃と薛宝釵との結び付きを指摘されている。

(18) これらの他にも、月の白さを表すのに梨花が用いられる例、艶っぽい場面に梨花が用いられる例等がある。

(19) 梨花の用例は、主に『六十種曲』（テキストは、『六十種曲評注』黄竹三・馮俊傑主編、吉林人民出版社、二〇〇一年を使用）に収められている戯曲からのものが多いが、この他にも、明清の主な小説や戯曲を調査するにあたり、『明清言情小説大観』（殷国光・叶君遠主編、華夏出版社、一九九三年）や、中華書局出版の「明清伝奇選刊」シリーズ（一九八八年～）、春風文芸出版社出版の「明末清初小説選刊」シリーズ（一九八一年～）等を使用した。

(20) 『明清言情小説大観』（注19）所収。

(21) 同じ湯顕祖による『紫釵記』第二十五出「折柳陽關」にも、李生と別れるにあたり、霍小玉が涙を流す様子を表すのに、「冰壺迸裂薔薇露、闌干碎滴梨花雨、珠盤濺湿紅銷霧。」とある。

(22) 梨花自体で衰弱した美女の姿を表す例もある。例えば、明・楊珽の『龍膏記』第七出「閨病」には、ヒロインの元湘英が病で衰弱し、その寂寞な様子を表すのに、「……寂寞炉煙冷、睡怯梨花渾未醒。」とあり、清・蔣士銓の『臨川夢』第二十齣「了夢」には、婁江の今にも死にそうな姿を表すのに、「慘慘戚戚枯梨貌、淒淒楚楚病楊腰。」とある。

(23) 『連環記』「明清伝奇選刊（注19）」（張樹英点校、中華書局、一九八八年）。

(24) 『鉄花仙史』「明末清初小説選刊（注19）」（沈錫麟校点、春風文芸出版社、一九八五年）。

(25) 因みに、「雨打梨花」が女性ではなく、場面全体の寂寥な雰囲気を表す場合に用いられている例も多々見られる。その場合に特徴的なのが、「長恨歌」をふまえた古人の詩詞の句、中でも前に述べた宋・秦観の「鷓鴣天」詞の「雨打梨花深閉門」の句を用いることが多い、ということである。紙幅の都合から、一例だけを挙げれば、例えば、『西廂記』第五出「白馬解圍」には、崔鶯鶯が恋の悲しみに気がふさぐ場面に「雨打梨花深閉門」とある。

『紅楼夢』薛宝釵の人物像と梨花